三河國
八橋

の舟を横に並べて、大綱及び大鐵もてつなぎ、其上に板を渡して陸地をあゆむが如くす、其大造なる事、むかしの佐野の船橋ハいざしらず、今の世に名を得たる越中國神通川の船橋にはまさるかにまされり、誠に海道第一の壯觀といふべし、佳境遊覽曰、大樹御上洛之時、懸二舩於此川一也、朝鮮人來朝、又舩有レ此、舟二百五十艘爲二舟橋一、舟與レ舟間三尺餘、用二大鐵條一繫合、布二板於其上一云々、

〔慶安三年木曾路記〕小船　渡なり、木曾川の末なり、御上洛の時、又は朝鮮人來朝の時は舟橋か、る、尾濃兩州より沙汰す、舟千五百艘にて懸るなり、川より向は美濃國なり、

〔運歩色葉集屋〕八橋三州

〔和爾雅一下地理〕參河國　八橋（ヤツハシ）渡川

〔書言字考節用集一乾坤〕八橋（ヤツハシ）三州碧海郡、見二伊勢物語一、

〔名所方角抄三河〕八橋川花の瀧より八橋の宿三町計西也、北より南へ流れたる小川也、橋も壹丈計なり、四角なる木のちいさきを八つわたしたり、

〔羅山文集六十一雜著〕本朝地理志略　東海道十五箇國

參河國　杜若澤有二八橋一、在原中將業平、來二此處一詠二倭歌一、

〔國花萬葉記八參河〕八橋　名所景物　沼の八橋　櫻　時鳥　杜若　蜘手　事によめり　岡崎の宿よりちりふの宿へ越る中間より、半道計北の方八橋と云村の中に有、南より北へ流るゝ小川にわたしたる壹丈計なる橋也、

〔倭訓栞前編八久〕くもで○中略　昔し八橋のかゝりし川は、今の遇妻川也とぞ、更級日記に八橋は名のみにして橋のかたもなしと見ゆ、

〔十六夜日記殘月抄一〕八橋　與清按に、八橋に二所あり、そは伊物、古今、古今六帖に見えたる八橋と、更級日記、舊本今昔物語より後のものにみえしは、所異也、更級、今昔より後にいふは、參河國圖を考に、碧海郡池鯉鮒宿の東なる里村のつゞきに有、○中略　東海道名所記四に、今村、西田云云、海道より北のかた一里ばかりに八橋の舊跡あり云々、東遊行囊抄六に、追分、池鯉鮒野ニア